

【予報の概要】

農作物名	病虫害名	発生程度	
		現況	予想
早期水稲	いもち病(穂いもち)		やや少
	紋枯病	並	並
	穂吸汁性カメムシ類	並	並
普通期水稲	いもち病(葉いもち)	並	並
	紋枯病	やや少	やや少
	縞葉枯病	やや多	やや多
	セジロウンカ	やや少	やや少
	トビロウンカ	並	並
	コブノメイガ	やや少	やや少
大豆	ハスモンヨトウ		やや多
いちご (育苗床)	うどんこ病	多	多
	炭疽病(G.cingulata)	並	並
	ハダニ類	多	多
	ハスモンヨトウ	やや多	やや多
アスパラガス	アザミウマ類	やや少	やや少
かんきつ	かいよう病	やや少	やや少
	黒点病	少	やや少
	ミカンハダニ	並	並
	チャノキイロアザミウマ	並	並
びわ	がんしゅ病	並	並
	ナシヒメシンクイ	並	並
なし	ナシヒメシンクイ	並	並
ぶどう	べと病(防除情報第8号)	やや多	やや多
果樹共通	カメムシ類	並	並
茶	炭疽病	やや少	並
	チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少
	チャノコカクモンハマキ	並	並
	チャノホソガ	やや少	やや少
	カンザワハダニ	やや多	やや多
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
クワシロカイガラムシ	やや多	やや多	

【発生予報】 本文の()内は平年値

早期水稲

1. いもち病(穂いもち)

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(41筆)の結果、葉いもちの発病株率は0.0%(1.4%)、発生圃場率は4.9%(17.4%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、葉いもちの発病株率は0.6%であった(発生を認めない)。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(41筆)の結果、発病株率は0.3%(0.5%)、発生圃場率は9.8%(15.2%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率は23.0%(21.0%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 穂吸汁性カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬のイネ科雑草におけるすくい取り調査(33地点)の結果、捕虫網による10回すくい取りあたり虫数は5.2頭(11.8頭)であった(表)。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

種類別	10回すくいとり当たり虫数						発生地点率	
	H17	H18	H19	H20	平年	H21	平年	H21
ホリハリカメムシ	0.7	0.4	0.4	0.4	0.7	0.3	61.3	56.3
クモヘリカメムシ	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.1	8.9	25.0
シラホシカメムシ	0.3	0.2	0.1	0.1	0.3	0.1	35.2	37.5
アカスジカスミカメ	15.9	10.4	9.0	10.8	10.7	4.6	70.5	90.6
ミナミアオカメムシ	0.00	0.01	0.05	0.02	0.01	0.03	2.6	3.1
計	16.9	11.1	9.6	11.3	11.8	5.2		

注) 数値は10回すくい取りあたりの虫数

すくい取り虫数の平年はH11~20年の最大・小値を除いた平均値

(ミナミアオカメムシはH13~20年の平均値)

発生地点率の平年はH13~20年の平均値

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降に水田周辺の雑草地を除草すると本田へのカメムシ類の飛来を助長するので行なわない。

イ 本田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布すると効果が高い。また、周辺雑草地も含めて広域一斉防除をおこなうと防除効果が高まる。

ウ ミナミアオカメムシは斑点米を発生させる能力が高いので圃場での発生に注意する。また一部の薬剤で感受性の低下が報告されているので、薬剤の選定にあたっては十分注意する。

普通期水稻

1. いもち病(葉いもち)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(111筆)の結果、発病株率は0.0%(0.1%)、発生圃場率は3.6%(3.4%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。

ウ 普通期早植の一部でずりこみ症状がみられた。

エ 7月以降、葉いもちの感染に好適な条件を満たした日が長崎、島原、松浦、大瀬戸、口之津、芦辺で認められた(葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 余り苗、補植苗は発病の伝染源となるので早めに処分する。

イ 葉いもちの急性型病斑が見られた場合は早急に防除を行う。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月上旬の巡回調査(111筆)の結果、発生を認めなかった(発病株率0.0%、発生圃場率1.1%)。
- イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

- ア 7月上旬の巡回調査(111筆)の結果、縞葉枯病の発生株率は0.1%(0.0%)、発生圃場率は2.7%(2.2%)であった。
- イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。
- ウ 7月上旬の巡回調査(111筆)の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.08頭(0.04頭)、発生圃場率は22.5%(13.6%)であった。
- エ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、ヒメトビウンカの寄生は認めなかった(寄生株率1.8%、株当たり虫数0.0頭)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病株は伝染源となるので見つけ次第できるだけ抜き取る。
- イ ヒメトビウンカの圃場での発生に注意する。

4. セジロウンカ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア これまでの飛来量は平年より少ない。
- イ 7月上旬の巡回調査(111筆)の結果、セジロウンカの株当たり虫数は0.4頭(1.3頭)、発生圃場率は52.3%(62.3%)であった。
- ウ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、株当たり虫数は0.5頭(0.9頭)、寄生株率は38.0%(54.9%)であった。

5. トビイロウンカ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 6月22日に予察灯(五島市)で初確認した。その後の飛来量は地域によって異なり、並~やや多である。
- イ 7月上旬の巡回調査(111筆)の結果、株当たり虫数は0.00頭(0.00頭)、発生圃場率は4.5%(3.3%)であった。
- ウ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、寄生は認めなかった(株当たり虫数0.01頭、寄生株率1.0%)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後の圃場での発生状況に注意し、7月下旬~8月上旬にかけて100株当たり20頭以上の成虫の寄生が認められる場合は、それらの次世代幼虫期に防除を行う。
- イ 株元に多く寄生するので薬剤散布にあたっては、株元に薬剤が十分付着するよう丁寧に散布する。
- ウ 圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、できるだけ圃場の見回りを徹底する。また、飛来波の今後の発生予測は図のとおりであるが、地域や圃場により発生状況が異なることがあるので、それぞれの圃場における発生状況を把握した上で防除を行う。

6. コブノメイガ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(111筆)の結果、食害株率は0.1%(1.9%)、発生圃場率は7.2%(20.5%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、食害株率は2.0%(21.5%)であった。

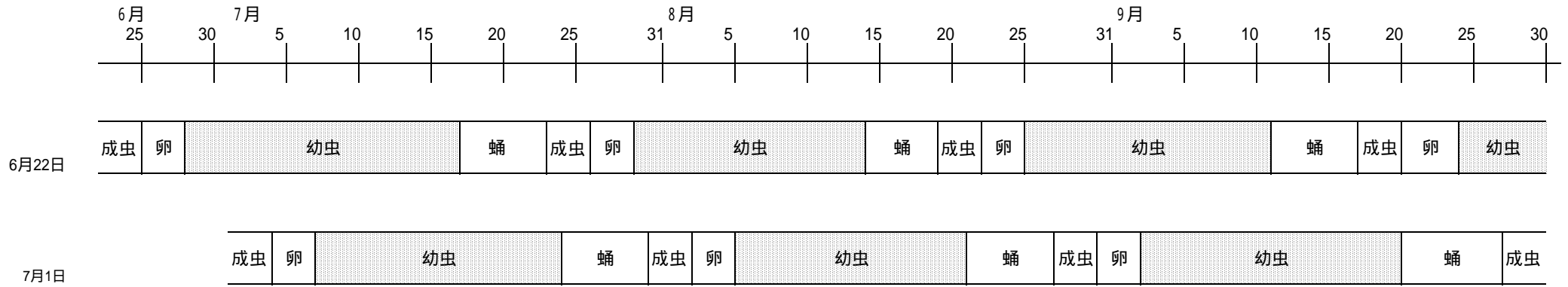
(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤散布は、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後、粒剤では成虫発生最盛期に行う。なお、粒剤は効果を安定させるため散布後7日間止水する。

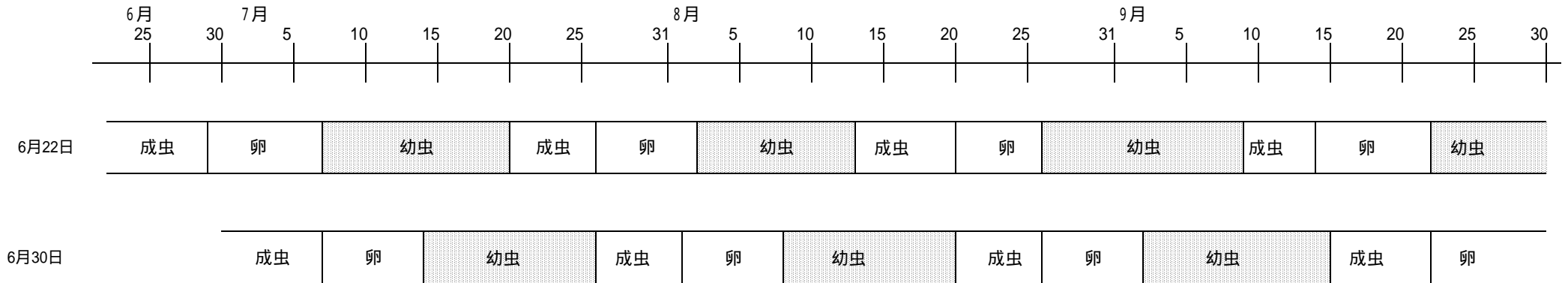
イ 各飛来波の今後の発生予測は図のとおりであるが、地域や圃場により発生状況が異なることがあるので圃場の見回りを徹底し、それぞれの圃場における発生状況を把握した上で防除を行う。

(図) コブノメイガ、トビイロウンカの発生予測図(平成21年)

1. コブノメイガ



2. トビイロウンカ



発生予測の気温は諫早市小船越町(農林技術開発センター)のデータを用いた(7月12日まで実測値、13日以降は平年値)

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、6月5半旬から7月1半旬にかけて平年より多く推移している(図)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に薬剤散布する。

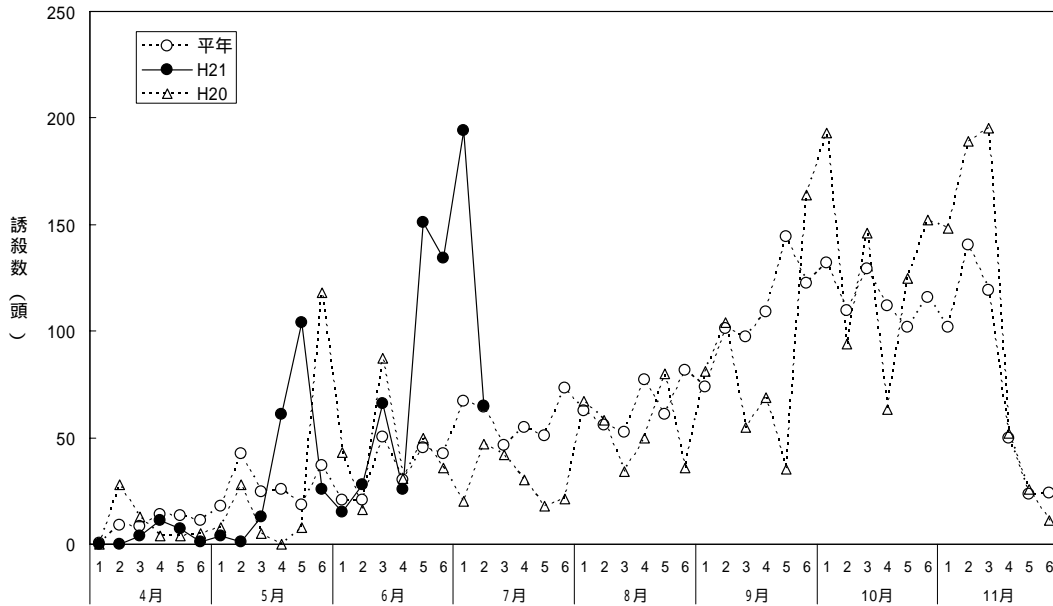


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市)
平年: H11~H20の平均値(最大・小値除く)

(月・半旬)

いちご

1. うどんこ病

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は9.6%(4.1%)、発生圃場率は66.7%(43.6%)であった。

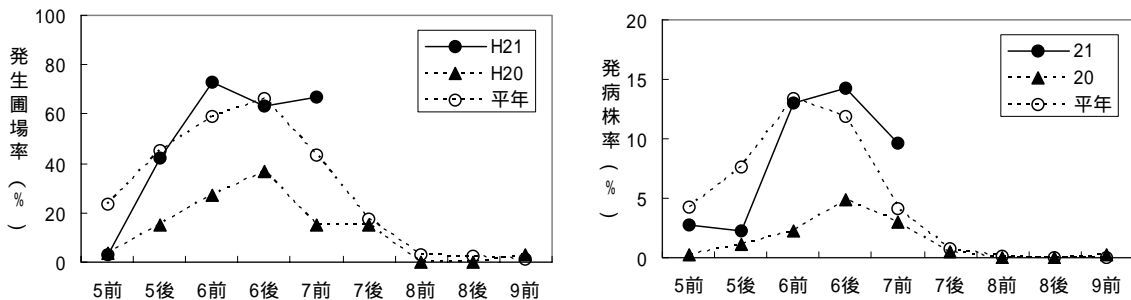


図 いちご育苗床 うどんこ病の発生推移(巡回調査)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤散布は、薬液が葉裏、葉柄に十分かかるように散布する。
- イ 除去した茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。
- ウ 薬剤耐性菌発達防止のため、同一系統の薬剤は連用しない。
- エ 雨よけ育苗では、本病が発生しやすいので注意する。
- オ 夜冷・株冷処理を行なう場合は、入庫前の防除を徹底する。

2. 炭疽病 (G.cingulata)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発生を認めなかった(発生圃場率1.9%、発病株率0.0%)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗床が多湿にならないように、連続した長時間のかん水はしない。密植を避け、排水対策を確実に行う。
- イ 高設育苗や全面マルチを行い、降雨等による地面からの病原菌の跳ね上がりを防止する。
- ウ 発病した子苗およびその周辺の株は速やかに処分する。また、発病した親株から採苗した子苗は育苗せずに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。
- エ 葉の展開間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。特に長雨、台風などの前後、下葉除去など株を傷つけるような作業後に重点的に行う。
- オ 夜冷・株冷処理を行なう場合は、入庫前の抜き取り及び薬剤防除を徹底する。

3. ハダニ類

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、寄生株率は3.3%(0.6%)、発生圃場率は27.3%(6.4%)であった。

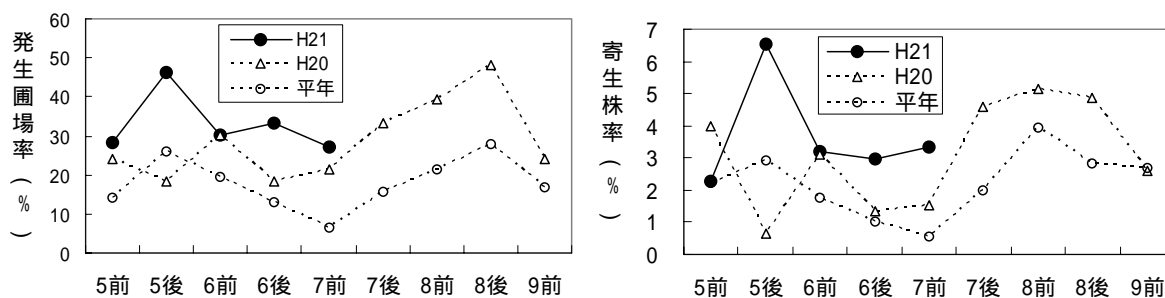


図 いちご育苗床 ハダニ類の発生推移(巡回調査)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤散布は散布むらがおこらないように、葉裏まで付着するように十分量をていねいに散布する。
- イ 薬剤感受性が低下しやすいので、同一薬剤は連用しない。
- ウ 本圃での天敵放飼を予定している場合は、薬剤によっては長期間影響を与えるものがあるので、使用時期に注意する。

4. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、食害株率は2.3%(0.5%)、発生圃

場率は39.4% (15.4%)であった(図)。
 イ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は6月5半旬から急激に増加し、7月1半旬まで平年より多く推移した(大豆の項参照)。

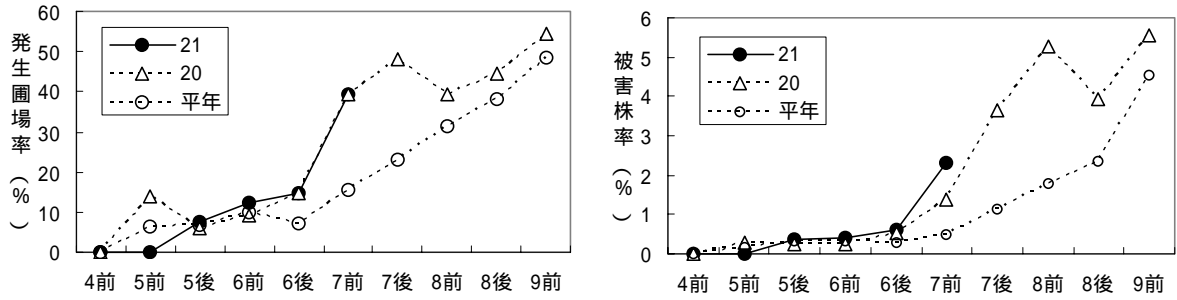


図 いちご育苗床 ハスモンヨトウの発生推移(巡回調査)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 幼虫は齢が進むと薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に防除を行う。
- イ 薬剤は虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

アスパラガス

1. アザミウマ類

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(9筆)の結果、払い落とし虫数(10.5cm x 22.5cmの白色板に5回 x 10ヶ所)は4.1頭(前年24.7頭、前々年20.6頭)、発生圃場率は66.7%(前年88.9%、前々年77.8%)であった。

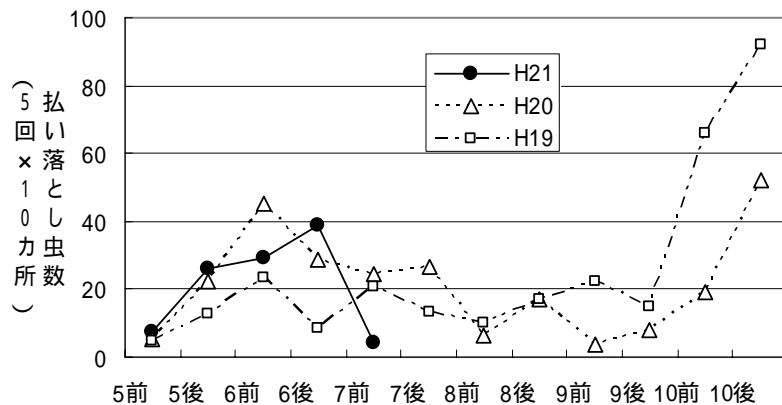


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移(巡回調査)
 払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

かんきつ

1. かいよう病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、発病葉率は0.0%(0.7%)、発生圃場率は7.7%(26.2%)であった。

2. 黒点病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、発生は見られなかった(発病果率1.5%、発生圃場率19.7%)であった。
- イ 向こう1か月の気象予報では降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、寄生葉率は6.0%(10.0%)、発生圃場率は43.6%(48.4%)であった。

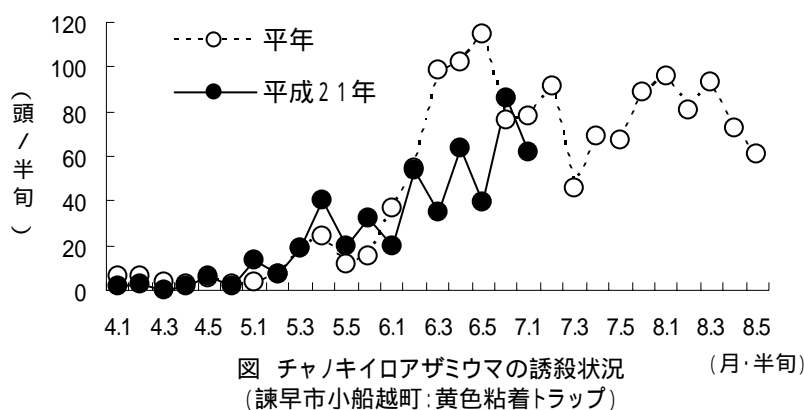
4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、果梗部の被害果率は0.2%(1.0%)、発生圃場率は7.7%(12.7%)、果頂部の被害果率は1.1%(0.3%)、発生圃場率は17.9%(3.9%)であった。
- イ 黄色粘着トラップ(諫早市)による誘殺量は、平年並で推移している(図)。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 下表の予測発生ピーク日5日前から発生ピーク日に薬剤散布をすると防除効果が高い。
- イ ただし、発生が多い圃場では1果当たりの寄生虫数が、0.1頭に達する前に防除を行う。
- ウ 茶、かき、ぶどう、イヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

表 チャノキイロアザミウマ発生予測プログラムによる成虫の予測発生ピーク日

アメダス地点	長崎	佐世保	大村	島原	松浦	大瀬戸	口之津
第4世代	7 / 17	7 / 18	7 / 19	7 / 17	7 / 25	7 / 26	7 / 19
第5世代	8 / 3	8 / 4	8 / 4	8 / 2	8 / 11	8 / 13	8 / 5
標高(m)	27	4	3	9	5	43	10

注1: 気温データは各地域のアメダスデータにより平成21年7月13日時点で算出し、7月14日以降は平年値(ただし島原及び松浦は2008年測定値)を使用した。

注2: 同一地区内でも、標高や土地条件で予測発生ピーク日が異なる場合があるので注意する。

びわ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は0.8%(1.2%)、発生圃場率は30.0%(36.3%)であった。

2. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発生を認めなかった(寄生枝葉率0.0%、発生圃場率2.5%)。

イ フェロモントラップ(諫早市)での誘殺量は平年並で推移している(図)。

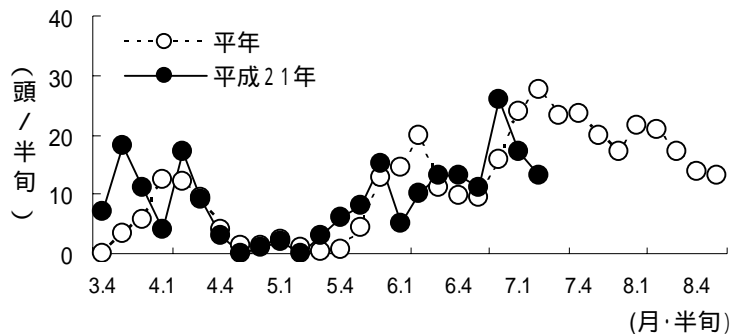


図 ナシヒメシンクイの誘殺状況
(諫早市小船越町:フェロモントラップ)

なし

1. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ(諫早市)での誘殺量は平年並で推移している(びわの項参照)。

ぶどう

1. ベと病

平成21年7月15日付け、病害虫発生予察防除情報第8号による。

果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 各地区(諫早市小船越町、西海市西彼町、南島原市有家町、諫早市多良見町)のフェロモントラップでの誘殺量は、平年よりやや少なく推移している(図)。

イ 7月上旬に実施したピーティング調査の結果、ヒノキきゅう果の着生量はやや少ないものの、ほぼ全ての地点でチャバネアオカメムシの寄生を認めており、ヒノキ林付近の園地では飛来する可能性がある。

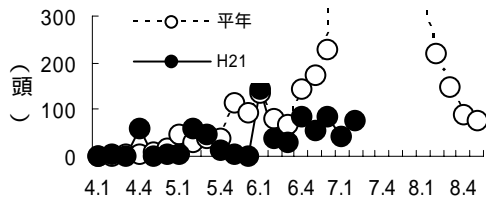


図 チャバネ・ツヤアオカメムシの誘殺状況 (月・半旬)
(諫早市小船越町:黄色コガネコル)

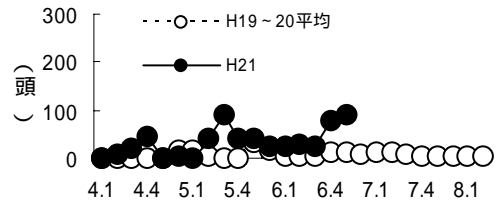


図 チャバネ・ツヤアオカメムシの誘殺状況 (月・半旬)
(西彼:黄色コガネコル)

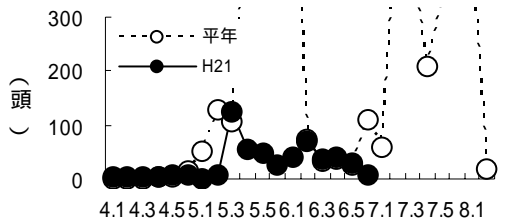


図 チャバネ・ツヤアオカメムシ誘殺状況 (月・半旬)
(有家:黄色コガネコル)
平年は平成17～20年の平均

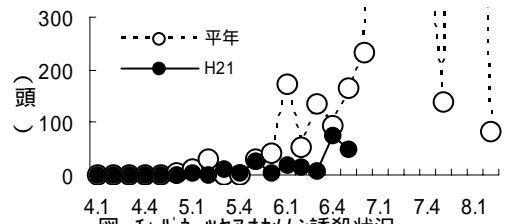


図 チャバネ・ツヤアオカメムシ誘殺状況 (月・半旬)
(多良見:黄色コガネコル)
平年は平成17～20年の平均

茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡あたり発病葉数は0.6枚(5.7枚)、発生圃場率は30.0%(57.8%)であった。

イ 向こう1か月の気象予報では降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

2. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は7.9頭(17.9頭)、発生圃場率は70.0%(80.6%)であった。

3. チャノコカクモンハマキ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡当たり巻葉数は0.1枚(0.2枚)、発生圃場率は5.0%(10.5%)であった。

イ フェロモントラップによる誘殺量(農林技術開発センター茶業研究室調査)は平年並で推移している(図)。

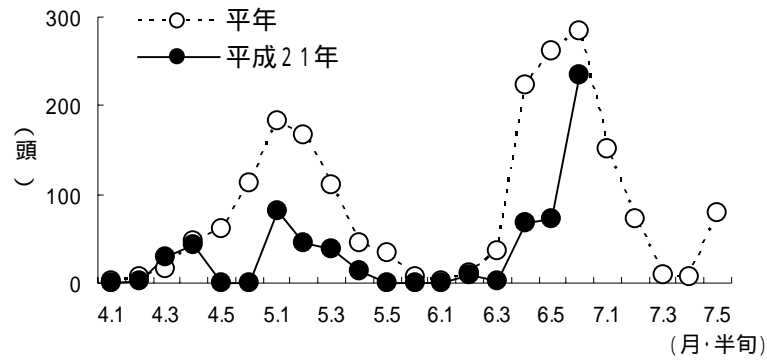


図 チャノカケモンハマキの誘殺状況(東彼杵:フェロモントラップ)

4. チャノホソガ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、発生を認めなかった(1㎡あたり巻葉数0.1枚、発生圃場率5.8%)。

イ フェロモントラップによる誘殺量(農林技術開発センター茶業研究室調査)は平年並で推移している(図)。

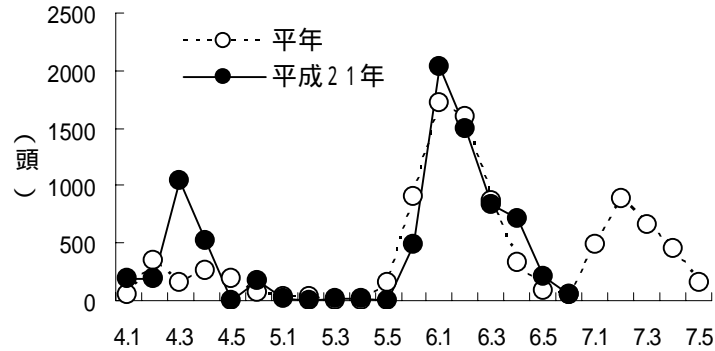


図 チャノホソガの誘殺状況(東彼杵:フェロモントラップ) (月・半旬)

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生葉率は1.7%(0.1%)、発生圃場率は55.0%(7.2%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

葉裏にすることが多いので、葉裏にも十分薬液がかかるよう散布する。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は3.6頭(1.4頭)、発生圃場率は70.0%(41.4%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

葉裏にすることが多いので、葉裏にも十分薬液がかかるよう散布する。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生株率は10.3%(4.0%)、発生圃場率は50.0%(31.1%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表のふ化盛期予測日を中心に防除する。なお、独自にふ化盛期日を現地調査し防除適期を判断している地域ではその判断を優先する。

イ 株内の枝や株元に薬液がかかるように十分量散布する。

表 「有効積算温度則による防除適期予測法」によるクワシロカイガラムシのふ化盛期予測日(第2世代)

地区名	東彼杵町太の原	五島市上大津
予測日	7 / 2 5	7 / 1 4
標高(m)	3 6 0	7 7

注1：予測方法は「有効積算温度則による防除適期予測法(農林技術開発センター茶業研究室)」により7月13日時点で算出した。

注2：使用する気温データは、茶業研究室の気温データ(東彼杵町)及びアメダスデータ(五島市)を使用した。

注3：同一地区内でも標高や土地条件でふ化盛期日が異なるので注意する。

【参考】
気象

(平成21年7月10日発表 1か月予報 福岡管区気象台)
要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	40	30
降水量	30	30	40
日照時間	40	30	30

予報対象地域：九州北部地域

平成21年の気象経過（長崎海洋気象台）

長崎市 気温

